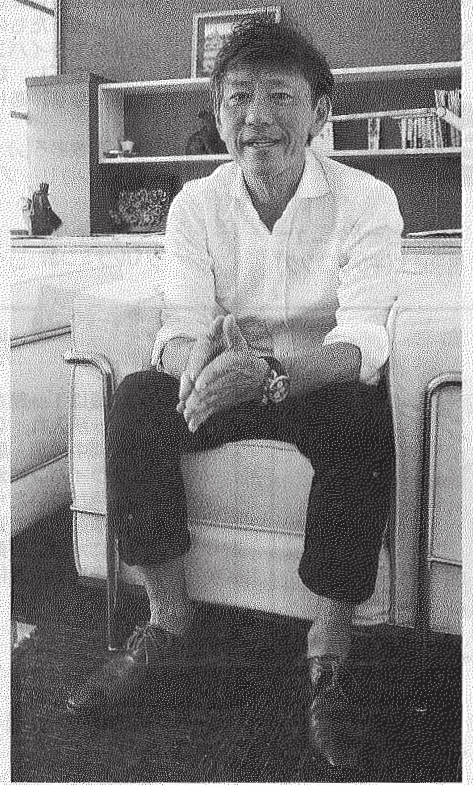


ミャンマーに小学校

アイエフシーシステム

恩返し of 思いで建設

那智勝浦町の株式会社アイエフシーシステム（松出博喜社長）は今年夏、ミャンマーに小学校を建設し、10月23～26日、松出社長と18人の社員らが現地を訪問した。



小学校建設への思いを語る松出博喜社長＝7日、那智勝浦町の株式会社アイエフシーシステム



僧侶から感謝状を渡された（アイエフシーシステム提供）

松出社長は2011年の紀伊半島大水害の際、同町井関地区の自宅が被害を受けた。支援への恩返しをたいの思いから、社員らと共に地域での復興ボランティアなどを中心に社会福祉活動に取り組むようになった。その後、活動の幅を広げたいと模索するうち、御坊市の和歌山・ミャンマー友好協会の存在を知った。

「訪問して途上国の現状を肌で知れば、社員教育にもなる」との説明を受けて決断。中小企業による学校建設ボランティアの例は少なく、不安も感じながらの挑戦だった。建設には現地に法人を持つ同市の紀南電設が協力し、「支援が行き届いていない地域に建てたい」などの要望を

伝えながら実現した。

学校名は「モンキッシュのサリマンガラ僧院小学校」。ミャンマーでは公立小学校はごく少数で、寺院が運営する学校が主流だ。今年1月に建設を始め、雨季の中断を経て夏に完成した。旧首都ヤンゴンから車で4時間ほど離れた、バゴー管区ダイウー地区のミンガロン村にある。元々あった校舎では40～50人ほどしか入ることができず、多くの子どもが順番を待つ授業を受けていたが、約100人の受け入れが可能になった。

照明付きの教室や、ソーラー発電の設備、トイレ、ヘビ毒用の血清を保管する冷蔵庫などを備え、校庭にはサッカーゴールも設置した。「集中して学べるように」との思いや、「学校は楽しい場所だと感じてほしい」との願いが反映されている。

10月の訪問では松出社長一行は盛大な歓待を受けた。近隣からは保護者や住民も集まった。開校式が行われ、3人の僧侶によって祈りがこげられた。交流会で折り紙や紙飛行機を作ってプレゼントすると、子どもたちは目を輝かせた。

松出社長は今回の学校建設事業について、「紛争やIS（イスラム国）」によるテロなど、世界情勢は決して平和とは言えません。原因には貧困があり、抜け出すには教育が必要だと思えます。その一助になればとの願いもありますし、我々にとっても見聞を広げることができ、相互に得るものがあると思っています」と話した。



完成した校舎（アイエフシーシステム提供）

交流会に参加した社員の平野貴江さん（49）は「ヤンゴンは比較的都会でしたが、道中は高床式の家屋など、日本と全く違う景色が広がっていました。学校では子どもたちが『おはようございます』『ありがとうございます』『おはようございます』『ありがとうございます』などの日本語を覚えて歓迎してくれて、キラキラとした純粋な瞳が印象に残っています」と感想を話した。

（山崎花乃子）